

船戸与一『満州国演義』試論

——ハードボイルド・ミステリが問い直す「植民帝国としての日本」

坂元さおり

✉ 049296@mail.fju.edu.tw

Historian Shinichi Yamamuro, an expert in the history of political philosophy, claimed that he had dedicated himself to his book, *Manchuria Under Japanese Dominion (Enlarged Edition)*, trying hard to respond to Yoshimi Takeuchi, who in 1963 said, “Japan as a nation hadn’t held a funeral for Manchukuo yet.” He asserted one unforgettable fact that “in China, the thirteen-and-half-year-long existence of Manchukuo had been recognized as the fourteen-year-long tragic history starting from the date northeast China was invaded and occupied by imperial Japan.” He then continued to indicate that future studies on imperial Japan shall never regard Taiwan, Korea or any member of the Greater East Asia Co-Prosperty Sphere, as “an individual subject,” but shall perceive and understand “how Japan as a colonial empire gradually formed a system to integrate Asia as a whole” in advance so as to reexamine “the significance of Manchukuo’s position and status.” This research carefully investigates the hardboiled novelist Yoichi Funado’s posthumous *Manshukoku Engi* (9 Volumes, 2007-2015), which attempted to make a comprehensive response in a form of a novel to the questions raised by Yamamuro in *Manchuria Under Japanese Dominion*. Meanwhile, *Manshukoku Engi* depicted large-scale and tremendous changes under the context in which “Japan as a colonial empire” had been correlated to “Taiwan, Korea and the Greater East Asia Co-Prosperty Sphere” as well as “Manchukuo.” *Manshukoku Engi* has employed abundant critical and judgmental elements, which are believed in this research to be profoundly related to the technique of hardboiled detective novels manipulated by Funado.

Keywords Yoichi Funado(船戸与一), *Manshukoku Engi*(『満州国演義』), Hardboiled detective novels(ハードボイルド・ミステリ), Japan as a colonial empire(「植民帝国としての日本」), History of East Asia(東アジアの歴史)

1 はじめに

政治・思想史学者の山室信一は自著『キメラ—満州国の肖像』増補版¹執筆の理由として、竹内好が1963年に述べた「日本国家は満州国の葬式を出していない」²という言葉に少しでも応えたかったからだとし、「中国では、満州国の存続期間である十三年半を指して『東北淪陥十四年』と呼ぶ」「苦難の歴史」(p.362)であることを忘れてはならない、「石原莞爾が考えたように満州領有が『日本の活くる唯一の途』であったかどうかは、大いに疑わしい。しかし、満州国建国が近代日本の滅びへの道であったことには、いささかの疑いもない」(p.309)と糾弾の声をあげている。そして今後の「日本帝国の研究」では「台湾、朝鮮そして大東亜共栄圏それぞれを「個別的に取り上げる」のではなく、それらの地域を含む「植民帝国としての日本がアジアとつながるシステムを形成してきたという視点から」「満州国がもっていた定点的な意味」(下線引用者、p.377)をとらえ直す必要がある、と述べている。

この山室の問いに小説の形で全面的に答えようとしたものとして、ハードボイルド・ミステリ作家・船戸与一(1944-2015)の遺作『満州国演義』(全九巻、2007-2015)を本稿ではとりあげたい³。本作は「植民帝国としての日本」が「台湾、朝鮮そして大東亜共栄圏」及び「満州国」にどう関わっていったか、という視点から壮大なカタストロフィが語られていくのだが、本作が持ちえた豊かな批評性は、船戸が用いた「ハードボイルド・ミステリ」という方法と深く結びついていると筆者は考える。

そもそも「ハードボイルド」というジャンルは、世界大戦中に従軍し「大量死」を経験したハメットやケイン、マッコラー、チャンドラーといった作家たちによって生み出され、「非情」、「暴力」といったモチーフを特徴とするが、「日本のハードボイルド史は、第二次世界大戦後の進駐軍による大量のペーパーバックの流入や、アメリカのハードボイルドの翻訳や紹介から本格的に受容される」⁴。そこから大藪晴彦『野獣死すべし』(1958)や生島治郎『黄土の奔流』(1965)など日本語のハードボイルドが産みだされていくわけだが、大藪や生島が「大日本帝国」時代の朝鮮・京城(大藪)／上海(生島)の出身であり、そこからの過酷な引き揚げ体験が自らの作品の根底にあると語っているのは注目される⁵。また彼らの後続世代にあたり、船戸与一とも親交の深かったハードボイルド作家・藤田宜永は、先輩作家・大藪や生島の過酷な戦争体験こそが、彼らの作家としての出発点にあった点に触れながら、「ハードボイルド・ミステリこそが、もう一つの日本の

1 山室信一『キメラ—満州国の肖像』増補版(東京：中央公論新社、2004)。

2 竹内好『満州国研究の意義』(『内なる中国』所収、東京：筑摩書房、1987)。

3 『満州国演義』巻末には【参考文献一覧】が付せられているが、中に山室の本書も挙げられており、実際山室の同書を参考にしたと思われる箇所も何か所か見受けられる。

4 押野武志「ミステリーとハードボイルドのあいだ」(『輔仁大学シンポジウム ミステリーの迷宮』論文集、2012)。

5 大藪春彦『問題小説7号 蘇る野獣 追悼特集・大藪春彦の世界』(東京：徳間書店、1996)、生島治郎『男の行動原理 ハードボイルド風に生きてみないか』(東京：KKベストセラーズ、1979)等。

戦後文学だった」と述べ、自らの作品群をその系譜の上に位置づけている⁶。ここで注目したいのは、大藪や生島とは異なり藤田自身が「戦中」世代ではなく、実際の引き揚げ体験はないにもかかわらず、自らの作品を含む「日本のハードボイルド・ミステリ」というジャンル全体の問題として、上記のような発言をしている点である。そして筆者の考えでは、こうした問題意識は「日本のハードボイルド・ミステリ」全体に共有され、「ジャンル」自体が要求する問題意識となっている⁷。

そうした「ハードボイルド・ミステリ」作家の中でも、船戸与一は「ハードボイルド」という形式そのものが「帝国主義」を否応なく浮彫にする、という問題意識を物書きとしての原点に置き、終生それを貫いた作家だった⁸。そして世界各地で起こる国家間・民族間・階級間・宗教間の衝突と軋轢を物語化してきた船戸ワールドの集大成が、遺作『満州国演義』なのである。それに加えて、船戸がノン・フィクションのルポルタージュ作家として文筆活動をスタートし、小説家となった後も、膨大な歴史資料に基づき物語を産み出していったこと—例えば『満州国演義』巻末に挙げられた膨大な《参考文献》は一種の「満州国」に関する最新の先行研究一覧ともなっている⁹—、そして船戸の「ハードボイルド・ミステリ」の作品群でとられる歴史観が、日本を舞台とする時には明治維新はもとより、近世末期の「蝦夷地」への侵略も一貫して血塗られた暴力の歴史として描かれてきた¹⁰、という点も『満州国演義』の持つ批評性と大きく関わっているだろう。

船戸の『満州国演義』は「満州国」（「大日本帝国」）崩壊から60年を超えて書き始められているが、本作で描かれる戦前の日本の姿が「現在の日本とあまりに酷似」しており、再び「近視眼と狭い視野でカタストロフィに向かって突進」しようとする現代日本への「優れた予言」足り得ている、と評しているのは同じハードボイルド・ミステリ作家として船

6 「藤田直永氏 血の弔旗を書き上げた資料山積みの仕事場」『NEWSポストセブン』2015.08.27, http://www.news-postseven.com/archives/20150827_344877.html (2017.05.20閲覧) なお、「ハードボイルド・ミステリ」に特化したものではないが、「引揚げ体験」を「日本戦後文学」と結びつけて論じた近年の研究に朴裕河「引揚げ文学論序説 新たなポストコロニアルへ」(人文書院, 2016)がある。

7 藤田の提言を考えてみれば、90年代、大沢在昌(生島治郎の「後継者」を公言)や馳星周、桐野夏生といった作家たちがなぜ「新宿歌舞伎町」を舞台に東アジア諸地域のやくざたちの血みどろの抗争を描いてきたか、という点も腑に落ちるし、北方謙三が直木賞選考委員となった直後、盟友・船戸の「虹の谷の五月」(2000)を強く推し、直木賞受賞が決まるが、後に同じく北方が強く推し「流」(2015)で直木賞を受賞した東山彰良が、馳や大沢といった先輩作家たちへの敬意を熱く口にするのはなぜなのか、という理由も見えてくる。この点については以前拙論「東山彰良『流』論——「ハードボイルド・ミステリ」が異化する(東アジア)三世代の「歴史」と「記憶」——」(『跨境・日本語文学研究』Vol.4, 東アジアと同じ時代日本語文学フォーラム×高麗大学校GLOBAL日本研究院, 2017)で触れた。

8 「ハードボイルド小説とは帝国主義がその本性を隠蔽しえない状況下で生まれた小説形式である。したがって、その作品は作者の思想が右であれ、左であれ、帝国主義のある断面を不可避的に描いてしまう。優れたハードボイルド小説とは帝国主義の断面を完膚なきまでに切り裂いてみせた作品を言うのである」(豊浦志朗(船戸与一)、「ハードボイルド試論 序の序—帝国主義下の小説形式について」大岡昇平『ミステリーの仕掛け』(社会思想, 1996採録, 下線引用者)。

9 『満州国演義』巻末の《参考文献》は六部に分かれ、【満州国関係】が120冊、【関東軍関係】が17冊、【帝国陸海軍関係】が73冊、【国内外情報】が135冊、【中国大陸関係】が48冊、【図説・資料・辞典類】が58冊を数える。

10 デビュー以来、海外を舞台として数多くの少数民族にまつわる物語を紡ぎ出してきた船戸が、読者の声に応じて近世末日本を舞台とした最初の作品が『蝦夷地別件』(1995)である。

戸とも親交の深かった馳星周である¹¹。『満州国演義』ではノモンハン戦、上海事変、南京事件、インパール作戦など、多くの凄惨な地獄絵図が描かれるが、それを可能にしたのは、船戸作品を貫く歴史観、そしてノン・フィクションを織り交ぜた船戸流ハードボイルドの手法と言えるだろう。そして多くの史的資料を用いながらも、本作のタイトルが『満州国演義』と、その「演義＝フィクション」性を前面に打ち出し、主人公格の登場人物がすべて船戸が創り出した架空の存在である点も興味深い。というのも、この「演義＝フィクション」性こそが、本作が60年前の日本の姿を描きつつ、現在の日本と二重写しで読まれることを可能とするものではないかと考えられるからだ。

以上のような関心から、本稿では船戸の遺作『満州国演義』を考察の対象とするが、本作は船戸のライフワークの頂点に位置する作品で、なおかつ九巻にわたる大長編であるため、本稿は船戸ワールドに迫るための一試論であることを先に断っておきたい。なお、この巨編を探るための端緒として、本稿後半では特に「台湾」との関わりに注目する。というのも、船戸はデビュー作『非合法員』(1979)で「大日本帝国の崩壊と台湾(或いは沖縄)」から物語をスタートさせており、遺作『満州国演義』の直前に取り組んだのも、「現代台湾」を舞台とした一連の作品群—『三都物語』(2003)、『金門島流離譚』(2004)だったからだ。つまり「台湾」と「日本」の関係は船戸のライフワークの原点にあり¹²、それが遺作『満州国演義』でどのように展開され、「植民帝国としての日本」の姿を見せるのか問うことは、本作への一つの切り口となるとはずだ。

2 物語を貫く「謎」、そして反転し続ける「加害」と「被害」

『満州国演義』全九巻を通じて登場するメイン・キャラクターは五人いる。戊辰戦争で功を立てた長州藩士の孫息子・敷島四兄弟(太郎、次郎、三郎、四郎)と、この四兄弟に付きまとう関東軍特務機関の間垣徳蔵である。間垣徳蔵はことあるごとに「所詮、日本人は日本人だ、かならず大日本帝国のために何かをしたいという気になって来るはずだ」(第二巻, p.259)と嘯き、関東軍の使い勝手の良い駒にするために敷島四兄弟を追い詰めていく。本作品を牽引していくのは、間垣徳蔵が執拗に敷島四兄弟に付きまとうのはなぜなのか、という「謎」なのだが、その答えは物語の結末近く—「満州国もろとも日本帝国がぶっ壊れる前」(第九巻, p.241)に明かされる。それは戊辰戦争にまで遡る壮大な復讐劇だったわけだが、しかしその「謎」が解ける時、読者に投げかけられるのは、「大日本帝国／国家／民族／人間とは何か」というより大きな「謎」なのである。そしてこの大

11 馳星周「解説」(船戸与一『満州国演義』第一巻、東京：新潮社、2015)。

12 70年初頭、台東出身の元日本陸軍兵(李光輝、日本名・中村輝夫、原住民名・スニオン)がインドネシアで見つかったニュースが日本でも報じられ、この後、台湾やマイクロネシア出身の元日本軍属・軍人たちの補償問題がニュースとなるが、この問題への関心がルポルタージュ作家・豊浦志朗(船戸のもう一つのペンネーム)の誕生となったことを井家上隆幸は明かしている。(「解説」『満州国演義』第九巻、東京：新潮社、2016)。

きな「謎」の前で、「加害」と「被害」の関係は反転しながら立ち現れる。本節ではこの点について、敷島四兄弟と間垣徳蔵との関わりから見ていくことにしよう。

まず敷島家の長男・太郎だが、第一巻1928年(張作霖爆破事件)時点では、外交官として奉天総領事館に勤務している。理想に燃えた若き官吏として外交問題に真摯に取り組み、関東軍に盲目的忠誠を誓う弟・三郎と太郎は激しく対立するのだが、1932年の満州国建国以来、ゲーテ『『ファウスト』の一節』にもある「国家を創りあげるのは男の最高のロマン」(第三巻, p.40)という「新国家建設」の欲望に取り込まれていく¹³。しかしその「最高の浪漫」「満州国」が太郎を大きな闇に引きずり込んでいくことは、建国当初から匂わされている。というのは、建国を記念して名付けられた太郎の長男・明満が四歳の幼さで死に、そこに満州国崩壊の予感を太郎は感じ取っているからである。太郎はその後、不吉な予感から逃れるかのように愛人(丁路看)を作り、その愛人を殺し、妻・圭子を発狂へと追い込み、最後(1946)はシベリアの抑留地で自己嫌悪の中、自死を選ぶ。間垣徳蔵は要所要所で太郎の前に現れ、敗戦を目前に敷島家の秘密を太郎に語る。

次に「国家」にあまりにも忠実で、任務のためなら実の兄・太郎にも銃を向けることを厭わないのが、三男の三郎である。第一巻の時点で関東軍の陸軍少尉として三郎は登場するが、後に憲兵の花形となる。数々の謀略に手を染めるが、「新国家建設」という「最高の浪漫」が殺戮につぐ殺戮を産み出すことを三郎はよく知っている。加えて「国家」のためどれだけ殺戮に手を染め、汚れ仕事を引き受けようと、「憲兵」という極秘任務(汚れ仕事)をこなす身分柄、任務中命を落としても決して「靖国には祀られない」ことを自覚してもいる。大きな矛盾を抱え込みつつも「国家と添い寝」を続ける三郎だが結局、敗戦と同時に満州国からの逃避行をせざるを得なくなる。その途上、通化の地で作戦失敗必至の無謀な反撃に身を投じ、命を落とすのだが、それはまるで「死に場所を探している」(第九巻, p.598)かのような死に方であった。三郎の前にも間垣徳蔵はしばしば姿を現すのだが、憲兵である三郎の任務は間垣徳蔵の謀略と同種であり、「大日本帝国のために何かする」ことが、結局「死に場所を求める」生き方となることを浮き彫りにしていく。

こうした「国家を創りあげる最高の浪漫と添い寝」(第三巻, p.40)して滅びの道を突き進む太郎や三郎に対し、一貫して「国家」への帰属感を持たないのが次男の次郎と末弟の四郎である。だが、いかに次郎と四郎が「国家」と距離を取ろうとも、結局滅びの道を歩む点では二人も同じなのであり、こうした点こそが『満州国演義』の物語としての豊饒さと大きく関わっている。つまり、『満州国演義』は他の船戸の一連の作品と同じく、一面的な国家(大日本帝国・関東軍)批判の物語ではないのだ。

次男・次郎については、本稿が分析の主軸とする「ハードボイルド」の典型的キャラクターであるため、頁を割いて説明しておきたい。物語冒頭で次郎は「馬賊の頭・青龍攬把」として満州の地を駆け巡っている。「日本という国家に対して何とも思っていない」(第一巻, p.112)と言い放ち、馬賊の頭としての身分を1928年に失った後も、自らの力だけ

¹³ 前掲山室の書籍中にも『ファウスト』と満州国建国の「ロマン」との結びつきが見られる。p.23.

を頼みに荒仕事を請け負う。次郎の腕を見込んだ間垣徳蔵は「大日本帝国のために働けとは言わない。金銭のために汗を流してもらおう」(第二巻, p.264)と口説き、結局、次郎も「金銭のために」間垣徳蔵の駒として動かざるをえなくなる。だが作中で、次郎の男気・俠気は敬意を払われるべきものとして描かれ、多くの殺戮に手を染めつつも、その行為は「満州の夢・理想」といったロマンの香気に包まれる¹⁴。

では、なぜ次郎の手による暴力だけが、敬意をもって作中、描かれるのだろうか。マックス・ウェーバーが正しく指摘するように、「すべての国家は暴力の上に基礎づけられて」おり、「国家は暴力行使への「権利」への唯一の源泉とみられている」¹⁵。そこでは「国家」以外の「自らの掟を持つような中間団体」(例えば匪賊)は排除の対象となる。太郎や三郎は「国家」の側に立つことによって、こうした「中間団体＝匪賊」を排除する立場に立つ。そして次郎は物語冒頭では「馬賊の頭」、つまり「匪賊」と見なされる側にある¹⁶。こうした次郎の立ち位置ゆえに、次郎は特権的存在として描かれるのだろうか。

結論から言えば決してそうではない。というのもエリック・ボブズボームが喝破するように、「国家」によって排除された「中間団体」(「匪賊」)は「反国家」として自らを位置づけながらも、いつしか「国家」と平行な暴力装置と化していく¹⁷。つまり「国家」であれ、その「国家」から「匪賊」と周辺に追いやられるような反国家的一群であれ、結局は相似形の似た者同士に過ぎないのだ。

実際、当時日本人馬賊として満州の地に渡った者としては伊達順之助(張宗援)、小日向白朗(尚旭東)、松本要之助(小天竜)、中島成子(韓太太)などがおり、中でも檀一雄『夕日と拳銃』(1956)等のモデルとなった伊達順之助(張宗援)は、名家の出ながら「隅田川畔で人をあやめたことがきっかけとなって」「日本を飛び出し」¹⁸、緑林の徒として名を馳せるなど、次郎の人物設定と重なるところも多い。だが、これら史実上の日本人馬賊たちは、結局は国家や軍閥にとりこまれていったのであり¹⁹、檀一雄『夕日と拳銃』の「伊達麟之介」は「義」を重んじ「日本帝国主義に奉仕しつつ敗戦を迎え」た人物として描かれ

14 次郎の死後、間垣徳蔵は次のように語る。「盧溝橋事件が起きたとき、次郎くんが駆け抜けようとした満州の夢は終わった。そして、次郎くんが死んだとき、多くの日本人が夢見た満州は理想の国家の欠片さえ失って重い重い鉄鎖でしかなかった」(第九巻, p.238)。ここに端的に現れているように、次郎は「満州の夢・理想」を体現する存在だった。

15 M.ウェーバー『職業としての政治』(脇圭平訳、東京：岩波文庫、1980、原典は1919)。

16 厳密に言うなら「馬賊」はいわゆる「匪賊」とは異なり、「義」を尊ぶ自衛組織としての性格が濃い。だがそうした区別を「日本側はほとんど顧慮する必要を認めなかった」。加えて「中国側からすれば、日本軍こそはまさしく『馬賊』」であり、「満州事変や日華事変は、いわば、日本側の御用馬賊と中国民衆の自衛組織としての馬賊との闘いであった」(渡辺龍策『馬賊』、中公新書、1964、p.110)。

17 E.ボブズボーム『匪賊の社会史』(船山榮一訳、筑摩書房、2011)。

18 渡辺前掲書(注16に同じ)。

19 渡辺前掲書(注16に同じ)によると、盧溝橋事件以降、「『大陸雄飛の夢』に煽られて大陸に渡ってくる日本の青年たちも、かつてのように野放しに既存の馬賊集団に身を投ずるということは、ほぼ皆無となった。そして、たいていは、軍指導下の宣撫班員として、軍が一方向的に道県に配置した地方行政連絡員として、あるいは教育専員として、いずれも華北軍司令部の囑託という身分で特務機関に配属されていった」(p.165)。それ以前から活躍していた日本人馬賊も、同様の道を辿る。

ている²⁰。それに対し、次郎の特異性はあくまで「独り」を貫き、「国家」・「匪賊」両方に取り込まれないぎりぎりの場所に留まり続けようとする点にある。

1928年(第二巻)以降、次郎は馬賊の頭であることを止め、後には間垣徳蔵からの仕事も請け負うようになるが、次郎が重んじるのは自らのルール(「漂う柳絮の如く生きる」²¹、「女子供は殺さない」)のみである。また次郎が恋人や自分自身の家族を持たない点も、公的領域でも私的領域でも、所属する場所がないことを示している。ちなみに、こうした一匹狼のヒーロー像は船戸の作品群に頻出し、先行するハードボイルド作家・生島治郎が菊池光を援用しながら定義する「ハードボイルドな主人公」の型とも一致している²²。だが、こうした「型」通りともいえる次郎の造型も、物語全体の中に置き直してみるならその「型」自体が問われ、船戸が遺作において切り拓いた大きな批評性を見ることができる。この点については次節で満州国、大日本帝国のあり方も絡めて説明する。

最後に四兄弟の末弟・四郎だが、間垣徳蔵に終始付きまとわれ、阿片中毒にさせられ、無意識のうちに殺人を犯してしまった後は、次から次へと望まない仕事—慰安所(娘子軍)経営のための予備調査や開拓村(弥栄村)での聞き取り調査、左翼狩りの喫茶店経営など—に手を染めさせられる。だがそうした中で四郎は北京語、上海語、ロシア語を次々と習得し、それらの言語を自らのものとしていく。それは即ち、それぞれの言語を母語とする人間との交流を深め、相手の視点で物事を捉えようと四郎がしたことを意味する。だがそうした境界的な立ち位置ゆえに、四郎は眼前で繰り上げられる地獄絵図に押しつぶされそうにもなる。

こうした四郎の持つ弱さ、不器用さゆえに、兄たち(特に次郎、そして最後は間垣徳蔵までも)は四郎を庇護しもする。そのため四郎は、四兄弟の中で唯一生き延び、戦後原爆投下に荒れる広島にたどり着く。だが「生き延びる」ということは果たしてハッピーエンドなのか、むしろ次なる地獄への第一歩ではないのか、だとしたら自分はその一歩をどのように踏み出せばいいのか、四郎の混迷は深まる中、物語は幕を閉じている。

このように『満州国演義』の結末は「戦後、原爆投下後の広島」で終わっているのだが、間垣徳蔵がなぜ数島四兄弟を十数年に渡り付け回したのか、という「謎」もその直前(1945)に明らかにされる。そもそも本作冒頭には戊辰・会津戦争(慶応四年、1868)のエピソード—長州藩士による会津藩士の妻の凌辱事件—が置かれているのだが、その「会津藩士の妻」は間垣徳蔵の祖母にあたり、間垣徳蔵は数島四兄弟と「祖父」を同じくする従兄

20 細川忠雄「解説」(『夕日と拳銃』下、東京：角川文庫、1958)

21 この「漂う柳絮のように」という言葉は、満州へと渡り、雑誌『満州浪漫』の中心人物となった長谷川四兄弟の三男・長谷川濬の日記にも、満州を印象付ける言葉として書きつけられている(大島幹雄『満州浪漫 長谷川濬が見た夢』、藤原書店、2012)。

22 「ハードボイルドな主人公は他のいかなる通念にも屈しない——匹狼である。(略)彼は、独自の道徳律に基づいて行動し、他のいかなる通念も、その道徳律に照らして理解し、判断する。彼は、いつも、自己の道徳律をもたない人間のために、自分の信条に基づいて行動する。彼は、この社会における最後の紳士である。紳士であり続けるためには、戦わねばならない場合もしばしばある。時には人を殺さなければならないこともある」。菊池光「訳者あとがき」(R. パーカー『約束の地』、生島治郎『ハードボイルド風に生きてみないか』所収、KKベストセラーズ、1979)。

弟同士だったことが明かされる。つまり間垣徳蔵が敷島四兄弟に付きまとったのは、己の出生への復讐が目的だったのだ。だが、この復讐譚が決して単純な「加害／被害」の構図に収まらないところに、本作の優れた批評性がある。以下に引くのは、「満州国もろとも日本帝国がぶっ壊れる前」(第九巻, p.241)、出生にまつわる秘話を間垣徳蔵が敷島家の長男・太郎に話して聞かせる場面である。

「憎んでた、敷島家を？」

「最初はそうだ、敷島四兄弟の運命を弄んでやろうと考えた。しかし、つきあいが深くなると、感情はしだいに複雑なものに変わっていった。血の繋がりがそうさせるのかどうか知らんが、妙な情が湧くようになった。何となく力を貸したくなったりする」

(略)徳蔵が燐寸箱を受け取って言った。

「わたしたちは維新の混乱のなかで獣性の虜となった祖父と貧乏籤を引いた祖母を持つ従兄弟同士だ。話しておきたかったのはそれだけだよ」

(略)太郎はせかせかと煙草を喫いつづけた。祖父はじぶんが生まれるまえに死んだし、父の口から祖父について詳しいことはほとんど聞いたことがなかった。長州兵隊として戊辰戦争に参加し、維新後の西南戦争でもそれなりの軍功を立てたということしか耳にしていなかった。ただ徳蔵が嘘を言っているとは思えなかった。そんなことをして何の意味がある？太郎は頭のなかからぼうっとして来るような気がした。(第九巻, p.246. 下線引用者)

ここで注目されるのは、「加害者」の子孫にあたる敷島太郎が、祖父の「軍功」による恩恵を受けつつも、その「軍功」(獣性)の「貧乏籤を引いた」「被害者」の子孫がどのような時間を過ごしてきたか知らないまま何十年も生きてきた、その事実「頭のなかからぼうっとして来るような」ショックを受け、狼狽している点である。それに加え、「被害」の側に立つ間垣徳蔵自身、己の血に「長州」をも抱え込んでおり、「獣性の虜となった祖父」を「自らの祖父」として引き受けていかななくてはならず、長年の敷島四兄弟への付きまとい行為(及び謀略の数々)が、「祖父の獣性」を自らなぞっていくという闇の深さが描かれていくのである。

間垣徳蔵が太郎に上の告白を終えてまもなく、二人は南下してきた赤軍に捉えられ、シベリア抑留の地獄を同じく経験するのだが、太郎は極度の疲労と飢餓、そして「天皇打破」を強制的に唱えさせられる閉鎖空間の中、日本抑留者の思想密告を請け負わされる。そんな太郎に対し、間垣徳蔵は「守って欲しい、最低の誇りだけは。誇りを失えば、生ける屍として一生苦渋の海を泳ぎ続けることになるぞ」(第九巻, p.587)と声をかけるのだが、太郎はそれに応えない。そんなある日、太郎の密告が他の抑留仲間にはばれ、太郎はリンチの対象となるのだが、間垣徳蔵は太郎の肩代わりとなり、死んでいく。だが間垣徳蔵が最後に太郎に向けた「軽蔑」・「憐憫」そして「無機質」な「眼差し」(第九巻, p.618)は、その後太郎につきまとい、太郎は深い絶望の中、自死を選ぶ。

こうした場面で描かれる「加害／被害」の絶え間ない反転は「敷島四兄弟(長州)／間垣徳蔵(会津(一部長州を抱え込む))」の関係に限らず、『満州国演義』で繰り返し描かれ、本作が戦争によって生まれる「加害／被害」の連鎖に肉薄しながらも、単純な二項対立の物語に回収されることを拒み、重厚な物語を紡ぎ出す基調低音をなしていく。

さらに前述したとおり、間垣徳蔵の口癖は「所詮、日本人は日本人だ。かならず日本帝国のために何かしようという気になって来るはずだ」だったわけだが、「会津／長州」の「血」の葛藤に苦しめられて育った間垣徳蔵にとって「日本人・大日本帝国」とはその矛盾を止揚しうるものであり、その「日本人・大日本帝国」との一体感を求める(「最低の誇りを守る」)行為が、敷島四兄弟への付きまとい行為だったといえる。だが、そんな「日本人・大日本帝国」という概念がきわどい矛盾に満ちたものであることは、物語の中で剥き出しにされていく。

3 「台湾」と「満州国」、そして「大日本帝国」と「民族の誇り」

本作は『満州国演義』と名付けられているが、「満州」という地域を超え、膨張を続ける旧大日本帝国そのものが舞台となっているが、「満州国建国」には台湾で起きた「霧社事件」が深く関係づけられている。本節では「台湾」が本作でどのように登場するか見ていきたい。それを通じて本作が「台湾、朝鮮そして大東亜共栄圏それぞれ」の地域を含む「植民帝国としての日本がアジアとつながるシステムを形成してきたという視点から」「満州国がもっていた定点的な意味」(山室、前掲)を問おうとしていることが明らかとなるだろう。そしてそれは「日本人・大日本帝国」の矛盾を曝け出すものでもある。

1930年年末、敷島家の長男・太郎は奉天総領事館でその年の10月台湾で起きた霧社事件の報に思いをめぐらせる。「十一月初めに指導者モーナ・ルダオの自殺によって、霧社蜂起は終熄に向かう」が、数多くの犠牲者を出した。この事件は「日本国内一般には知られていない」(第二巻, p.106)が、奉天勤務の外交官・一郎の元には届けられる。

そして奉天で憲兵中尉を務める三郎にもこの情報は届けられる。以前の同僚「鳴海克彦は台湾軍に転属になり、霧社事件鎮圧のためにマヘボ溪谷の掃討にあたったが、去年の十一月に戦死した。鹵獲された機関銃の掃射を浴びて即死したらしい」からだ。その報を受け、三郎の部下たち「独立守備隊第二大隊のかつての部下たち」は、鳴海克彦の叔母・雪子が奉天で開く小料理屋・於雪に連日「どっと押し掛けた」。「克彦の奉天での甲いは形式抜きでそうやって行われた」(第三巻, p.133)。

克彦の死から間もなく、三郎は間垣徳蔵とその於雪で会食を共にするのだが、間垣徳蔵は霧社事件の起きた背景を独自の分析を交えながら三郎に語る。それを聞いて三郎は「霧社事件によって、満州は何らかの影響を受けるのでしょうか?」と間垣徳蔵に尋ねるのだが、間垣徳蔵は「すでに受けている」、関東軍の石原莞爾参謀が「霧社事件」を受けて

「満蒙領有から新国家樹立節に舵を切りはじめた」と答える。

「霧社の蜂起はマヘボ溪谷の族長モーナ・ルーダオの指導のもとに行われたんだが、そのなかには花岡一郎という乙種巡査と花岡二郎という警手が混じってた。この二人はもちろん日本人じゃない。理蕃政策によって日本名をつけられたタイヤル族だ。他の蕃人とは比べものにならないほど優遇されていたのに、蜂起の先頭に立った。そのことが何を意味するか分かるかね？」

「いえ」

「民族の誇りは、ちょっとやそつとの金銭じゃ買えんということだよ」(第三巻, p.138)

霧社事件から導かれた「民族の誇りは、ちょっとやそつとの金銭じゃ買えん」という結論こそが、石原莞爾をして「満蒙領有」から「傀儡国家樹立」へと切り変えさせた、そう間垣徳蔵は分析し、次のように続ける。

「台湾山中の少数の蕃人にたいしてもあれだけ挺摺ったんだ、満州に住む莫大な数の支那人や朝鮮人が全面的な抗日戦を開始すりゃ日露戦争の何倍もの戦費を要するだろう。(略)連中が一齐に蜂起したら、それこそおびたしい量の日本人の血が流れることになるんだ。(略)石原参謀は(略)一種の浪漫主義者だ。満蒙領有もその浪漫主義の一環だった。しかし(略)傀儡政権の方が国益に適うとなりゃ、それでもよかつたんだよ。宣統溥儀が満州の復辟願望を洩らしたとき、石原参謀はこれで床の間はできたようなものだよと言っただけ。つまり傀儡政権も視野には入っていたんだ。それが霧社事件で決定的になったと考えてもいいだろう。」(第三巻, p.138)

この一連の間垣徳蔵の分析を耳にしていた小料理屋・於雪の主人・雪子は三郎に向かっていらだたしげに次のように言い放つ。「満州は傀儡国家じゃ駄目です。そんなことじゃ王道楽土の理想は消えてしまう」。

「もう言いたいことは言わせてもらいます。霧社事件での克彦たちの戦死を利用して傀儡国家を作るなんて、とんでもないことです。そんな汚い真似はやめて欲しい。(略)何かがおかしい。いえ、何もかもがおかしい。日本人もおかしいし、支那人も変。先月国民党は鮮人駆逐令を発表して朝鮮人を満州から追放しはじめたでしょう? いったい、何を考えているのかしら。満州の大地はこんなに広いのに、ちまちました自分の損得ばかり考えている。こんなことじゃ王道楽土の理想なんて創れるわけがない。」(第二巻, p.141)

「ちまちました自分の損得ばかり」、つまり「国益」ばかりに囚われている以上、「王道楽土の理想なんて創れるわけがない」という雪子の激しい言葉に、三郎は「どう反応しているか分からなかった」(第二巻, p.141)。

このように『満州国演義』では、さまざまな立場の者の言葉を衝突させることにより、それぞれの立場が相対化されていく。つまり上の引用で浮彫にされるのは、石原莞爾参謀と間垣徳蔵が「国益」、そして国民党が「党益」を最優先させようとするのに対し、甥・鳴海克彦の死から「国益」（「党益」）を語ることの欺瞞に気が付き「逮捕されてもいい」と於雪の主人・お雪は啖呵を切る。そして三郎は、自らも命をかける「王道楽土」という理想が、結局は「ちまちました自分の損得ばかり」という卑しい境地しか導かない現実言葉に言葉を失う。実際この後、物語は「満州」という土地をめぐる「おかしくなった」「日本人」「支那人」「ユダヤ人」「インド人」「ロシア人」たちの姿が書き連ねられていく。

さて、台湾で霧社事件が起きたのは1930年のことだが、この事件が傀儡政権としての「満州国」成立に実際、関わっていたという点は、歴史資料がある。河原功は張作霖爆破事件の張本人・河本大作が事件後、「政友会幹事長の森恪の依頼を受けて『満州』から霧社蜂起調査に赴い」ており、「森恪の依頼の真意は、台湾統治とも朝鮮統治とも異なった、別の統治形態を『満州』につくるうえでの参考にしようとしたこともあったらしい」と、河本大作の妻・久子の弟・平野零児『満州の陰謀者—河本大作の運命的な足あと—』（1959）を引きながら述べている²³。

確かに平野の『満州の陰謀者』²⁴には、河本が「新聞記者に化け」台湾に渡り、霧社事件について「自身で調べるほかに、台湾軍にある同志を通じ」「ぼう大な調査資料」を集め、「軍部と政界の有力な方面にも配布」した後、満州で板垣征四郎、石原莞爾と共に、溥儀による傀儡政権の話をした（「床の間はできたようなものと言った」）顛末が語られている。その上で平野は、霧社事件は日本から「親切顔に、押し付けられた他民族の言葉や習慣は、彼らにとって本当は喜ばしいものではなく」「部落の土木工事に労役を強要したことから、多年の不満が爆発した」、「結局は植民主義者が、他の弱²⁵民族を統治するという根本的な民族問題を、深く考えていない」「日本の統治者の自惚れ」（p.124）にあったと糾弾している。

本書を参照した河原は、こうした「台湾・霧社」と「満州国建国」の繋がりは「どうしたわけか一般にはあまり知られていない」と述べ、唯一文学作品化した『戦争と人間・3』（1965）を書いた五味川純平が満州生まれで、「関東軍一兵士として九死に一生を得た」点を指摘している。しかしそれ以降、ほとんど振り返られることのなかったこの問題に、船戸は本作でスポットを当てており、これは常に膨大な歴史資料を踏まえて物語を紡ぎ出す船戸ならではの面目躍如と言えるだろう²⁵。さらに本作では、歴史資料をただ

23 河原功『台湾新文学運動の展開 日本文学との接点』（研文選書、1997）。

24 平野零児『満州の陰謀者』（自由国民社、1959）。

25 船戸は講演会で「熱心な満蒙領有論者」だった石原莞爾が満州独立論を展開していく背景には、「宇冲漢という中国人」の強い影響があった、という通説を紹介しながら、しかしそれだけではなく、石原の「満州国がどのような国家であるべきかについての見解」が大きく関わっていたはずだと述べている。宇冲漢については『満州国演義』でも登場するが、石原の「満州国」の「国家観」を決定づけた要因として、台湾の霧社事件を船戸は物語中に組み込んでいったと言える（船戸与一『愛知大学東亜同文書院ブックレット『満州国演義』に見る中国大陸』、あるむ、2008）。なお『満州国演義』の参考文献一覧には河原功、平野零児、五味川

踏まえるだけでなく、「大日本帝国」が「帝国」として諸地域(大東亜共栄圏)を取り込んでいく際、それぞれの地域の「民族の誇り」をどのように包摂していくのか(或いは包摂し損なったのか)、というダイナミズムが描かれている。下でそれを具体的に見ていこう。

霧社事件で鎮圧された「高砂族」生き残りの男児―ハルワリス(明石春夫)は霧社事件から14年を経て、敷島次郎が参加するインパール作戦(1944)で、次郎の指揮下にいる。史実でもインパール作戦には「高砂族」出身の青年が軍属として徴用されているので²⁶、これも史実を踏まえた設定と言えるだろう。物語中でも史実同様、陸軍の命令系統は乱れに乱れ、囚人部隊を引き連れ進軍ともいえない進軍を迫られる次郎だが、ビルマのナガ族の住むカプラン村を通る際、「死んだ長老が使っていた」「首狩り用」の山刀が打ち捨てられているのに出くわす。その山刀を目にした明石春夫は、「いまは皇国によって禁止されたけど、じぶんにはナガ族と同じような首狩りの血が流れている」(第八巻, p.522)と話し、その山刀を身に着けていくことにする。

行軍中、明石春夫はしばしば次郎を助ける。例えば地滑りが起きた直後、明石春夫は次郎に警告を発し、「詳しいな、そういうことに」と尋ねられると、「台湾の霧社近くでも土砂降りで地滑りが起こる。一度起こると、二度三度と同じところがやられるんです」(第八巻, p.586)と答える。台湾山間部での「地滑り」が総督府主導の下の大量伐採に起因し、その労役に駆り出された「高砂族」の怒りが霧社事件の引き金の一つとなったことを考えるなら²⁷、この箇所は重い意味を持つが、それでも明石春夫は「皇国」への批判は決して口にせず、同行する戦友たちがバタバタと死んでいく中、その遺髪を山刀で切り取り、「じぶんもアラカン山系で死ぬかもしれない。けど、生きてビルマから抜け出したら(略)遺髪を届ける」(第八巻, p.589)と呟く。

そんな明石春夫を深く傷つける事件がこの直後に起きる。偶然出くわした南方軍遊撃隊参謀・辰巳俊吾大尉が空腹を訴え、明石春夫にナガ族の村へ出向いて「食料調達」してくるよう命じる。明石春夫は「じぶんはナガ族の言葉なんか喋れません」と断るのだが、辰巳はこう言い放つ。

「わかっているんだ、おまえが台湾霧社出身の高砂族だということはな。いくら皇民化教育を受けても蕃人だ。ナガ族も蕃人だ。蕃人は蕃人同士でわかりあえるはずだ、おまえが腰にぶら下げている蕃刀もナガ族からもらったんだろう?」

春夫の表情が強張りきった。両親を霧社事件で帝国陸軍に殺されながら、天皇の赤子として日本のために尽くしたいという心理は次郎には理解できなかった。しかし、春夫はそう言ったのだ。そしてそういうじぶんを蕃人と呼ぶことだけは赦さないとも断言した。春夫が無言のまま俊吾を睨み据えつづけた。(略)

純平の名は挙げられていない。

²⁶ 殷允芃『台湾の歴史』(丸山勝訳、藤原書店、1996)によるなら「太平洋戦争を勃発した日本」は「一万人を越す原住民青年を徴用して『高砂青年隊』を組織し、原住民が得意とするジャングルでの作戦に使ったり、物資を背負って運ぶ人夫にしたりした」p.334.

²⁷ 近藤正巳「台湾総督府の「理蕃」体制と霧社事件」(『近代日本と植民地』2、東京：岩波書店、1992)。

「断ります」

「何だと?」

「無意味な命令には従えません。」

「わたしに拳銃を使わせたいのか、この蕃人が!」

春夫の肉体が踊ったのはその一瞬だった。(略)振りあげられたときに刃が陽光を反射し、ざらりと光った。春夫がその山刀を力まかせに振り下ろした。(第八巻, p.893)

このように幾重にも「蕃人」という言葉で侮辱を受ける明石春夫だが、この場面における明石春夫、そして「山刀」の存在は、「植民帝国としての日本」の限界・矛盾を鋭く浮かび上がらせるものとして存在する。霧社の「高砂族」出身である明石春夫にとって、「山刀」は元々「霧社」という自らの出自の晴れがましい「伝統」に連なるものであった。だがその「民族の誇り」・「山刀」は、「植民帝国としての日本」によって「蕃人」の「野蛮な文化」として否定され、禁止される。1930年の霧社事件以降、「統治を脅かす凶器」としての意味合いは更に強まっただろう。明石春夫は両親を霧社事件で「植民帝国としての日本」に殺されているわけだが、その後の春夫は「天皇の赤子」、つまり「大日本帝国の一員」としての誇りを持ち成長し、1943年のインパール作戦に参加している。そこで発見した「ナガ族の山刀」を身に着けるようになったのは偶然だが、「山刀」は明石春夫のそれまでの記憶の集積を一気に爆発させるものとなる。

最初、その「山刀」を明石春夫が用いるのは、故郷に帰ることのない戦友たちの「遺髪」を切り取るためのもの、つまり「大日本帝国の一員」の役割を忠実に果たすためのものだった。だが「帝国陸軍参謀・辰巳」はその「山刀」を見下し、「いくら皇民化教育を受けようが蕃人は蕃人」といった言葉を春夫に投げつける。両親を殺されても「大日本帝国」の側に立ち、その一員として忠誠を尽くすことに「誇り」をかけた明石春夫にとって、「そういう自分を蕃人と呼ぶことだけは許さない」。その「誇り」を汚す人間がいるなら、陸軍内部の遙か上の上官であろうが、死を以て償わせる必要がある。「春夫の肉体が踊ったその一瞬」「振りあげられたときに刃が陽光を反射し、ざらりと光るが、この時躍動する「肉体」の「一瞬」、そして「陽光」を反射し「ざらりと光る刃」こそ、それまで封じ込められていた「矛盾」の爆発といえるのである。

自らが切り殺した辰巳の死体を前に立ちすくむ明石春夫に対し、次郎は「死体はすぐに白骨になる」から気にするな、と声をかけ、同行の兵士には「いま見たことは誰にも言うな!」と命じる。次郎には「両親を霧社事件で帝国陸軍に殺されながら、天皇の赤子として日本のために尽くしたいという春夫の心理」は「理解」できなくとも、春夫の心の痛み、そして「誇り」を守ろうとする気持ちはしっかりと受け止める。だからこそ、春夫を庇う言葉が次郎からは出るのだが、直後、次郎は体調を崩し、体には蛆が湧き、生命が潰えるのを待つばかりとなる。春夫は苦しむ次郎を見るに忍びず、腰に下げた山刀で次郎の息を止める。ここで「山刀」はもう一つ別の象徴を帯びる。即ち、次郎の命が「山

刀」に託されるかのように描かれるのである。

その後、しばらくして新京の敷島太郎は明石春夫の訪問を受ける。「日本名は明石春夫、高砂族名はハルワリスであります」と自己紹介をした後、「ご舎弟のご遺髪であります」と太郎に次郎の遺髪を渡し、ビルマでの様子を伝える。お礼傍ら「ゆっくり心身を休めるんだね」と労う太郎に対し、明石春夫は「ゆっくりなんかしてられません」と答え、次のように続ける。

「六日まえに台湾で第六十六師団が編制されたそうです。これまで高砂族は軍属にしかなれませんでした。第六十六師団では志願すれば高砂族も軍人になれるそうです。じぶんは台湾に戻ったら、すぐに志願兵として皇国のために身を粉にするつもりであります。」(第九巻, p.33)

台湾の志願兵制度が明石春夫(ハルワリス)の口を借りて語られているわけだが、満州国官吏として甘い汁を吸い続けてきた太郎に、「志願兵として皇国のために身を粉にするつもり」という明石春夫の気持ちは伝わただろうか。それとも名状し難い一つの「謎」として、心に残り続けるのだろうか。

以上見てきたように、「植民帝国としての日本」は、こうした「民族」と「帝国」の間の矛盾を引き受けて生きる明石春夫＝ハルワリスのような人間を育てる場でもあった。そして明石春夫＝ハルワリスの抱え込んだ葛藤は、敷島四兄弟を追いつめる間垣徳蔵の葛藤とも根底で繋がっている。というのは、二人がこれほどまでに「大日本帝国・日本人(皇民)」と一体化しようとするのは、それが自らの抱え込んだ「血」の葛藤を止揚させる唯一の道のように幻視されるからだ。だが、その「大日本帝国・日本人(皇民)との一体化」の夢が、いかに多くの矛盾を内包し、いつ爆発してもおかしくないものであるかは、明石春夫＝ハルワリスの「山刀」、そして間垣徳蔵の敷島四兄弟への陰惨な「付きまとい行為」によって示されている。

こうした危うさを秘めた明石春夫＝ハルワリス、そして間垣徳蔵という二人と、本作で特権的に描かれる「ハードボイルドな主人公・次郎」とのつながりをここでもう一度考えてみるなら、本作の批評性は更に明らかになるだろう。一匹狼的「ハードボイルドな」ヒーローとして「満州の夢・理想」を体現する次郎だが、実は間垣徳蔵との共通点は非常に多い。間垣徳蔵も次郎と同じく家族を持たず、常に独りで行動し、任務のたびに所属を変え、多くの殺戮に手を染める。その殺戮描写は次郎と異なり、ヒロイックに描かれることはほとんどないが、間垣徳蔵はある意味、次郎の陰画でもある。「独自の道徳律」(生島／菊池)に基づき行動し、「日本という国家に対し何とも思っていない」とうそぶき、「漂う柳絮の如く生きる」「ハードボイルドな主人公次郎と、「所詮、日本人は日本人だ、かならず大日本帝国のために何かしたいという気になって来るはずだ」と執拗に四兄弟につきまとい続ける間垣徳蔵が、実は「対」である、ということ。そしてその間垣徳蔵とパラレルの位置にいるハルワリス＝明石春夫が、自らの矛盾を幾重にも包みこ

んだ「山刀」で次郎の命を終わらせ、遺髪を切り取り、それを敷島家の長男・太郎に届ける、ということ。そうした行為は、敷島兄弟(戊辰戦争の勝者の子孫であるがゆえに、「大日本帝国」の生む「帝国／民族」の葛藤に比較的向き合わずとも生きていける者)に対し、「大日本帝国／国家／民族／人間とは何か」という問いを突き付けるものでもあるだろう。そして物語の過程で「加害／被害」の構図が何度も反転していくことは、本稿で見えてきた通りである。

敷島家の「祖父」が戊辰戦争で何をしたのか、その経緯は間垣徳蔵によって「大日本帝国」の崩壊の前に敷島家の長男・太郎だけに明かされた。そして次男・次郎の遺髪をハルワリス＝明石春夫から受け取ったのも、長男の太郎である。それに対し、敷島兄弟唯一の生き残り四郎は、その「記憶」を間垣徳蔵やハルワリス＝明石春夫から直接、受け取ったわけではない。だが、四郎の身体は間垣徳蔵の陰謀によって度々傷つけられ(アヘン中毒、右足の損傷)、別の意味で間垣徳蔵(やハルワリス＝明石春夫)の「記憶」を背負って、原爆投下後の広島へと辿りつく。

本作を読み終えた読者は、「大日本帝国」崩壊後の「戦後」、どのようにそれ以前の「記憶」を引き受けていくのか、という大きな問いを突き付けられることになる。そしてその「記憶」は、敷島四兄弟、間垣徳蔵、明石春夫＝ハルワリス(そして本稿では触れられなかった本作に登場する様々な国籍・身分の男女)の「記憶」を併せ持つ「記憶」であるはずなのである。

4 おわりに

こうした豊かな問題提起をはらむ本作および船戸作品だが、船戸研究はまだ端緒についたばかりである。例えば作家であり、ミステリー研究者でもある笠井潔は、船戸が好んでテーマに取り上げた「第三世界」の問題は「傑作『猛き箱舟』(1987)を頂点に「80年代の高度情報＝消費社会の成熟のなかで、しだいに失効しはじめ」、船戸の作品群はそれ以降の日本社会の要請に合わなくなっていったと評している²⁸。だがこうした船戸評は正しいのだろうか。

これに対し、唯一まとまった船戸論を書いている小田光雄は、船戸の問題意識は非常に先鋭的で、時代が追い付いていないだけだと言う。小田は船戸の評論集『国家と犯罪』(1997)を引きながら、その後出たテッサ・モーリス・スズキの『辺境から眺める』(2000)での問題意識を本書が先取りしている、と指摘し、船戸は70年代のデビュー当時から一貫して植民地問題にからむ、すべてのことをエンターテインメントに織り交ぜながら書き続けてきた稀有な作家だったと指摘している²⁹。本稿も小田の指摘に多くを教えられ

28 笠井潔「探偵小説の地層学」(『本格ミステリの現在』、東京：国書刊行会、1997)。

29 小田光雄「解説」(船戸与一『虹の谷の五月』、東京：集英社文庫、2003)。なお、小田には「船戸与一と叛史のク

スタートしたが、船戸世界の豊饒さは、もっと広く読まれるべきだし、船戸流「ハードボイルド・ミステリ」の切り拓いた批評性、そして「もう一つの戦後日本文学」（藤田、前掲）として存在してきた「日本ハードボイルド・ミステリ」ジャンル全体の問題と共に、もっと検討されるべきであると考え。

そして前述の笠井のような船戸評（「日本の80年代後半の高度消費社会の中で船戸作品の問題提起自体が失効」）が生まれる背景にあるのは、より深刻な「近代日本観」ではないか。というのは、（アメリカと異なり）「先住民を駆逐・侵略して作った国家ではない」「日本ではハードボイルドは成立しない」という見方が「ミステリ評」の世界には長く存在しており、こうした見方は戦後長く続く「近代日本観」でもあったからである³⁰。だが、船戸が問題とするのは、まさにそうした「近代日本＝先住民を駆逐・侵略して作った国家ではない」というような「植民帝国日本」のあり方を無視・無化するようなものの方見方自体なのであり、だからこそ船戸が初めて「近世末の日本」を舞台に書いた『蝦夷地別件』（1995）は、血塗られた凄惨な歴史として描かれるのである。

また、本稿「1. はじめに」で馳星周の言葉を引き、『満州国演義』で描かれる当時の日本が現代の日本と酷似している、という指摘を引いたが、こうした認識は今、多くの人に共有されている危機意識でもある。例えば経済研究者である岩田規久男も昭和恐慌時の経済状況と現在日本の経済状況の類似性を指摘し、昭和恐慌の結果「血盟団テロによる暗殺、5・15事件の衝撃、『満州国』の承認、ファッショ勢力の台頭」などが起きたことから、似た状況にある現在の言論に注意を促している³¹。また『満州国演義』の参考文献にもあがっているインドナショナリズム研究の中島岳史も現代日本と昭和恐慌時の類似性を指摘しているが、中島はその議論の中で戦中の「アジア主義」の肯定的側面を積極的に主張している³²。中島の議論も分からなくはないが、船戸の『満州国演義』では、「ハードボイルド・ミステリ」の手法を用いることによって、「現在、アジア主義を肯定すること」の危うさも十分描かれている。こうした「戦前の日本」が「現代の日本」と二重写しで受け止められる現代だからこそ、「演義」という形で「歴史」と「文学」の間を繋ごうとした船戸作品は、より多角的視点から読まれるべきではないだろうか。

付記 船戸与一『満州国演義』の底本としては、新潮社文庫版（全九巻）を使用した。

ロニクル』（青弓社、1997）という単著もある。

30 森村誠一は船戸与一との対談で次のように述べている。「昔、大御所の評論家が言ったことだが、「日本という国は銃器の社会じゃないし、開拓期のアメリカのように先住民を駆逐、侵略してつくった国家じゃない」「アメリカと違って、常にいちばん強い体制に保護されている国家であるからハードボイルドは育たない」「日本の作家はハードボイルドを書くべきではない」。（船戸与一、森村誠一「対談 戦後文学が生んだ異端の巨人」『問題小説7号 蘇る野獣 追悼特集・大藪春彦の世界』、東京：徳間書店、1996）。

31 岩田規久男『昭和恐慌の研究』（東洋経済、2004）。

32 中島岳史『アジア主義』（東京：潮出版社、2004）、『中村屋のポーズ——インド独立運動と日本のアジア主義』（東京：白水Uブックス、2012）、『血盟団事件』（東京：文藝春秋、2014）。

参考文献

- 押野武志(2012)『ミステリーの迷宮』論文集, 輔仁大学日本語学科 国際学術シンポジウム, Oshino, Takeshi(2012) *Misuteri no Meikyū*, FUJEN University symposium.
- ホブズボーム E.(1969,2011)『匪賊の社会史』船山榮一訳, 東京: 筑摩書房. E.J.Hobsbawm(1969,2011) *Bandits*, translated by Funayama, Eichi, Tokyo: Chikumashobō.
- 福田和也(2001)『地ひらくー石原莞爾と昭和の夢』, 東京: 文藝春秋. Funado, Kazuya(2001) *Chi Hiraku: Ishihara Kanjito Showa no Yume*, Tokyo: Bungeishinjūsha.
- 船戸与一(豊浦志朗)(1977)『叛アメリカ史』, 東京: ブロンズ社. Funado, Yoichi(1977) *Han Amerika Shi*, Tokyo: Bironzusha.
- 船戸与一(豊浦五郎)(1981)「ハードボイルド試論 序の序ー帝国主義下の小説形式について」, 大岡昇平(1996)『ミステリーの仕掛け』, 東京: 社会思想社. Toyoura, Gorō(Funado, Yoichi)(1981) *Hādohairudo Shiron jo no jo*: Teikoku Shugika no Shōsetu Keitai ni Tuite. Oka, Shouhei(1996) *Mistryno Sikake*, Tokyo: Shakaishisūsha.
- 船戸与一・森村誠一(1996)「対談 戦後文学が生んだ異端の巨人」『問題小説7号 蘇る野獣 追悼特集・大藪春彦の世界』, 東京: 徳間書店. Funado, Yoichi・Morimura, Seiichi(1996) *Taidan Sengo Bungakuga Unda Itann no Kyojin, Mondai Shōsetu Vol.7 Yomigaeru Yajyu Tuitou Tokusyu·Oyabu, Haruhikono Sekai*, Tokyo: Tokumashoten.
- 船戸与一(1997)『国家と犯罪』, 東京: 小学館. Funado, Yoichi(1997) *Kokka to Hanzai*, Tokyo: Shōgakusan.
- 船戸与一(2008)『「満州国演義」に見る中国大陸』, 「愛知大学東亜同文書院ブックレット」, Funado, Yoichi(2008) *Manshūkoku Engini Miru Chūgoku Tainku*, Aichidaigaku Tōa Dōbunshoin booklet.
- 馳星周(2015)「解説」『満州国演義』第一巻, ehd新潮社文庫版. Hase, Seishu(2015) *Kaisetsu Manshūkoku Engi 1*, Shinchōshabunko.
- 半藤一利(1997)『ノモンハンの夏』, 東京: 文藝春秋社. Hando, Kazutoshi(1997) *Nomonhan no Natsu*, Tokyo: Bungeishinjūsha.
- 平野零児(1959)『満州の陰謀者』, 東京: 自由国民社. Hlrano, Reiji(1959) *Manshū no Inbōsha*, Tokyo: Jiyūkokuminsha.
- 細川忠雄(1958)「解説」『夕日と拳銃下』, 東京: 角川文庫. Hosokawa, Tadao(1958) *Kaisetsu, Yūhi to Kenjū*, Tokyo: Kadokawabunko.
- 生島治郎(1979)『男の行動原理 ハードボイルド風に生きてみないか』, 東京: KKベストセラーズ. Ikusima, Jiro(1979) *Otoko no Kōdō Genri Hardboildfuu ni Ikiteminaika*, Tokyo: KKbestsellers.
- 井家上隆幸(2016)「解説」『満州国演義』第九巻, 東京: 新潮文庫. Ikegamui, Takayuki(2016) *Kaisetsu, Manshūkoku Engi Vol.9*, Tokyo: Shinchōbunko.
- 石川禎浩(2010)『革命とナショナリズム1925-1945 シリーズ中国近現代史③』, 東京: 岩波新書. Ishikawa, Teiji(2010) *Kakumei to Nashonarizumu Series Chugookukindaisi③*, Tokyo: Iwanamishinsho.
- 岩田規久男(2004)『昭和恐慌の研究』, 東京: 東洋経済. Iwata, Kikuo(2004) *Shōwa Kyōkō no Kenkyū*, Tokyo: TōyōKeizaisha.
- 笠井潔(1997)「探偵小説の地層学」笠井潔編『本格ミステリの現在』, 東京: 国書刊行会. Kasai, Kiyoshi(1997) *Honkaku Misuteri no Genzai*, Tokyo: Kokushokankōkai.
- 加藤陽子(2007)『満州事変から日中戦争へ シリーズ日本近現代史⑤』, 東京: 岩波新書. Kato, Yōko(2007) *Manshū Jihen kara Nichū Sensōhe Series Chugookukindaisi⑤*, Tokyo: Iwanamishinsho.
- 川島真(2010)『近代国家への模索1984-1925 シリーズ中国近現代史②』, 東京: 岩波新書. Kawashima, Makoto(2010) *Kindaikokka heno Mosaku 1984-1925 Series Chugookukindaisi②*, Tokyo: Iwanamishinsho.
- 川村湊(1990)『異郷の昭和文学ー「満州」と近代日本』, 東京: 岩波新書. Kawamura, Minato(1990) *Ikyō no shōwa Bungaku: Manshū to Kindai Nihon*, Tokyo: Iwanamishinsho.

- 川原功(1997)『台湾新文学運動の展開日本文学との接点』, 東京: 研文選書, Kawamura, Isao(1997) *Taiwan Shinbungakuundō no Tenkai Nihon Bungaku tono Setten*, Tokyo: Kenbunsensho.
- 川原功(2002)『環 特集 満州とは何だったのか』, 東京: 藤原書店, Kawamura, Isao(2002) *Kan Manshū towa Nan datta noka*, Tokyo: Fujiwarashoten.
- 近藤正巳(1992)「台湾総督府の「理蕃」体制と霧社事件」『近代日本と植民地 2』, 東京: 岩波書店, Kondo, Masami(1992) *Taiwan Soudokufu no Ribuntaisai to Mushajiken, Kindai Nihon o Shokumintō 2*, Tokyo: Iwanamishoten.
- ウェーバー M(1980原著(は1919)『職業としての政治』 脇圭平訳, 東京: 岩波文庫, M. Weber(1919, 1980) *Politik als Beruf*, Tokyo: Iwanamibunko.
- 成田龍一(2003)『司馬遼太郎の幕末・明治『竜馬がゆく』と『坂の上の雲』を読む』 東京: 朝日選書, Narita, Ryūichi(2003) *Shiba, Ryōtarō no Bakumatsu・ Meiji Ryouma ga Yuku to Sakai no Ue no Kumo*, Tokyo: Asahisensho.
- 中島岳史(2004)『アジア主義』 東京: 潮出版社, Nakajima, Takeshi(2004) *Ajia Shugi*, Tokyo: Ushinoshuppansha.
- 中島岳史(2012)『中村屋のポーズ——インド独立運動と日本のアジア主義』, 東京: 白水Uブックス, Nakajima, Takeshi(2012) *Nakamura Ya no Bose Indo Dokurikuundō to Nihon no Asia Syugi*, Tokyo: HakusuiU Books.
- 中島岳史(2014)『血盟団事件』 東京: 文藝春秋, NAKAJIMA, Takeshi(2014) *Ketsumeidan Jiken*, Tokyo: Bungeishinjusha.
- 朴裕河(2016)『引揚げ文学論序説 新たなポストコロニアルへ』 京都: 人文書院, Park, Yu-Ha(2016) *Hikiage Bungakuron Josetsu Aratana Post Colonial*, Kyoto: Jinbunshoin.
- 大島幹雄(2012)『満州浪漫 長谷川濬が見た夢』, 東京: 藤原書店, Ōshima, Mikio(2012) *Manshū Roman Hasegawa, Shunnga Mita Yume*, Tokyo: Fujiwarashoten.
- 大藪春彦(1996)『問題小説7号 蘇る野獣 追悼特集・大藪春彦の世界』, 東京: 徳間書店, Ōyabu, Haruhiko(1996) *Mondai Shōsetsu Vol.7 Yomigaeru Yajyu Tuito Tokusyu・Oyabu, Haruhiko no Sekai*, Tokyo: Tokumashoten.
- 小田光雄(1997)『船戸与一と叛史のクロニクル』, 東京: 青弓社, Oda, Mitsuo(1997) *Funado, Yoichito Hanshi no Kuronikurue*, Tokyo: Seikyūsha.
- 小田光雄(2003)「解説」船戸与一『虹の谷の五月(下)』, 東京: 集英社文庫, Oda, Mituo(2003) *Kaisetsu, Niji no Tani no Gogatsu*, Tokyo: Shūeisha.
- 佐藤優責任編集(2009)『現代プレミア ノンフィクションと教養』, 東京: 講談社, Sato, Yu(2009) *Gendai Premiere Non-fikushon to kyōyō*, Tokyo: Kōdansha.
- 昭和文学会(2002)『昭和文学研究 特集 方法としての(ドキュメンタリー)』, 東京: 昭和文学会, Showa Bungaku Kai(2002) *Shōwa Bungaku Kenkyū Tokusyu Houhoutsite no Documentary*, Tokyo: Shōwa bungaku kai.
- 植民地文化学会編(2014)『近代日本と「満州国」』, 東京: 不二出版, Shokuminchi Bungaku Kai(2014) *Kindai Nihon to Manshūkoku*, Tokyo: Fujishuppan.
- 関川夏央(2006)『「坂の上の雲」と日本人』, 東京: 文藝春秋, Sekikawa, Natsuo(2006) *Sakano Ue no Kumo to Nihonjin*, Tokyo: Bungeishunjūsha.
- 多木浩二(1999)『戦争論』, 東京: 岩波新書, Tagi, Kouji(1999) *Sensōron*, Tokyo: Iwanamishinsho.
- 竹内好(1963)「満州国研究の意義」(1987)『内なる中国』, 東京: 筑摩書房, Takeuchi, Yoshimi(1963,1987) *Manshūkoku Kenkyūno Igi, Uchinaru Chūgoku*, Tokyo: Tikumashobou.
- テッサ・モーリス・スズキ(2000)『辺境から眺める』, 東京: みすず書房, Tessa, Morris-Suzuki(2000) *Henkyōkara Nagameru*, Tokyo: Misuzushobō.
- 渡辺龍策(1964)『馬賊』, 東京: 中公新書, Watanabe, Ryusaku(1964) *Bazoku*, Tokyo: Chikokushinsho.
- 殷允芄(1996)『台湾の歴史』 丸山勝訳, 東京: 藤原書店, Yin, Yun-Peng(1996) *Taiwan no Rekishi*, Tokyo: Fujiwarashoten.

- 山内昌之ほか編(1997)『帝国とは何か』, 東京: 岩波書店. Yamauchi, Masayuki(1997) *Teikoku towa Nanika*. Tokyo: Iwanamishoten.
- 山室信一(1993,2001)『キメラ—満州国の肖像』増補版. 東京: 中公新書. Yamamuro, Shinichi(1993,2001) *Kimera: Manshūkoku no Syousyou*. Tokyo: Chūkōshinsho.
- 吉澤誠一郎(2010)『清朝と近代世界 19世紀 シリーズ 中国近現代史①』, 東京: 岩波新書. Yoshizawa, Seichirō(2010) *Shinchō to Kindai Sekai 19C Series Chugokukindaisi①*. Tokyo: Iwanamishinsho.
- ヤング・L(2001)『総動員帝国—満洲と戦時帝国主義の文化』, 東京: 岩波書店. Young, L(2001) *Sōdōin Teikoku Manshū to Senji Teikokusyugi no Bungaku*. Tokyo: Iwanamishoten.
- 小田光雄(2016)『ゾラからハードボイルドへ8 豊浦志朗ハードボイルド試論 序の序一. 小田光雄の出版・読書メモランダム. 2016年8月28日閲覧. Oda, Mitsuo(2016) *Zolakara Hadoboiruddhe 8 Toyouram Shito Hadoboirudosiron jonojo*. Oda, Mitsuno Shuppan, Access date: 2016.8.28. (<http://d.hatena.ne.jp/OdaMitsuo/20100530/1275229199>)
- 藤田宜永(2015) 藤田宜永氏血の吊旗を書き上げた資料山積みの仕事場. NEWSポストセブン. 2017年5月20日閲覧. Fujita, Yoshinaga(2015) Fujita Yoshinagashi Chino Cyoukiwo Kakiageta Shiryou Yamazumino Sigotoba. News post seven. Access date: 2017.5.20. (http://www.news-postseven.com/archives/20150827_344877.html)

坂元さおり Saori SAKAMOTO

(台湾) 天主教輔仁大学日本語文学系副教授。日本近現代文学、日本語教育。『現代日本の「フラット化」に文学はどう関わるか—水村美苗、桐野夏生、吉田修一、津島佑子の作品を中心に—』(台北: 尚昂文化社, 2015)、『東山彰良『流』論—ハードボイルドミステリが異化する(東アジア)三世代の「歴史」と「記憶」』(『跨境・日本語文学研究』Vol.4, 東アジアと同時代日本語文学フォーラム×高麗大学校GLOBAL日本研究院, 2017)など。